

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23530933

研究課題名(和文) 児童・生徒に対するコミュニケーション・スキル訓練の開発と実施

研究課題名(英文) Development and enforcement of the communication skills training for elementary school students and high-school students

研究代表者

牧野 幸志 (MAKINO, Koshi)

摂南大学・経営学部・准教授

研究者番号：00330762

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、現代の児童・生徒を対象とするコミュニケーション・スキル訓練を開発し、実施することにより、スキルを高め、不登校やいじめなどの問題が発生することを予防することであった。スキル尺度を作成し、児童・生徒を対象としたスキル訓練を行った結果、訓練後に、生徒の多くのスキルが向上していた。また、参加者の8割の生徒は、訓練前よりスキルが上がっていた。また、コミュニケーション・スキルの高い生徒ほど、友人関係が良く、友人関係に満足しており、精神的健康状態も良かった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop and enforce the communication-skills training for elementary school students and high-school students, and to prevent that problems such as school refusal or the bullying occurred. First of all, new skill standard was made, after that, the skill training was carried out. After training, some communications skills of the students concerned improved. 80% of the students raised some skills after the training then before. In addition, the students who had high communication skills, had better friendship, were more satisfied with their friend relations, and had better mental health than low-skill students.

研究分野：臨床社会心理学

キーワード：コミュニケーション スキル訓練 児童・生徒 心理学的介入 臨床社会心理学 青年期 対人関係

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、社会心理学と臨床心理学の中間に位置する「スキル」を扱う研究である。対人関係におけるスキルに関する研究は、主に社会心理学の「社会的スキル」の分野で研究がなされてきた。「社会的スキル」とは「他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能」である(相川, 1999)。社会的スキル研究は、Argyle(1967)の先駆的な研究に始まり、欧米で研究が進められてきた。それらの研究は主に社会的スキルが対人関係に及ぼす影響や個人の社会的スキルと他の特性との関連を検討するものであった。その後、日本においても数多くの社会的スキルに関する研究が行われ、社会的スキルを身につけるプログラムを開発する社会的スキル・トレーニングの研究が行われてきた(相川, 2000)。

(2)これまでの社会的スキル、社会的スキル訓練に関する先行研究にはいくつかの問題点がみられる。第1に社会的スキルの扱う範囲が狭いということである。社会的スキルには「人の話を聞く」、「自分を主張するスキル」などがあるが、多くの研究において行動面に焦点が当てられている。対人関係の問題を解決する際に行動面に焦点を当てることも重要であるが、対象者の認知面の変化を促すことも重要である。つまり、考え方を変えするというスキルも必要となる。また、従来の社会的スキル訓練では、ポジティブ・スキルが扱われていない。例えば、応募者が研究を続けているユーモア・スキルがどの程度対人関係に効果的かを知る必要もあるだろう。ユーモアにより笑いを引き起こすことにより、人間関係が良くなることもある。さらに、これまでは、社会的スキルは言語的反応に焦点が当てることが多く非言語的反応に注目することが少なかった。ジェスチャーや表情も重要なコミュニケーションツールである。これらのことから、本研究では社会的スキルよりもより狭義の概念であるコミュニケーション・スキルを扱う。児童・生徒に対するコミュニケーション・スキルの訓練を開発し実践する。第2に、これまでの社会的スキル研究は、主に青年期後期を対象として研究が行われてきた。また、社会的スキル訓練も主に大学生を対象として実施されてきた。しかし、現代社会において多くの問題を抱える中学生は思春期にあり、大学生とは異なった成長過程にある。これまで小学生・中学生を対象としたスキル訓練はほとんど行われていない。したがって、青年期前期を対象としたコミュニケーション・スキルの研究が不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、いじめ、不登校友人関係などさまざまな問題に直面する児童・生徒に対して

コミュニケーション・スキル訓練を行い、対人コミュニケーションの観点から、問題が起こらないようにする予防策、起こってしまった際の解決策を身につけさせようとするものである。本研究の目的は、児童・生徒に対するコミュニケーション・スキル訓練のプログラムを開発し、そのプログラムを実施し、問題予防行動、問題解決行動に役立てることである。この訓練プログラムの実施により、学校現場における対人関係の問題に対する心理学的介入が可能となり、児童・生徒の心身の成長に役立つと考えられる。

なお、本研究から派生したコミュニケーション・スキルの中の葛藤解決スキルの応用として関係崩壊時の対処方略の研究もいくつか実施した。

3. 研究の方法

本研究は代表者が中心となり教育現場で行う中規模の実践的研究であった。代表者と中学校の教職員の間では既に互いに協力体制ができていた。研究計画は大きく4つに分けられていた。児童のコミュニケーション・スキルの現状分析(調査研究)とコミュニケーション・スキルの分類とその測定(実験研究)、児童・生徒を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(プログラム開発)、児童・生徒を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の実践、学校でのコミュニケーション・スキル訓練のプログラムの汎用化(フィールド研究)であった。また、関係崩壊時の対処方略のスキルについても応用研究として実施した。

4. 研究成果

本研究の最終目的は、現代の児童・生徒を対象とするコミュニケーション・スキル訓練を開発し、実施することにより、スキルを高め、不登校やいじめなどの問題が発生することを予防することである。そのために、現代青年のスキルの調査を行い、その後、生徒に対するスキル訓練を行った。また、スキルの効果を測定する応用研究も行った。

(1)現代の生徒のコミュニケーション・スキルの現状と大学生との比較

第1研究では、中学生用コミュニケーション・スキル(以下、CSと表記)尺度を作成する。また、その尺度を使用して現代の中学生のCS、精神的健康状態が性別、学年によって異なるかを調査する。調査参加者は大阪府内の公立中学校に通う中学生418名(男子生徒213名、女子生徒205名)であった。CSに関する項目に対する因子分析の結果、自己表現スキル、状況判断スキル、会話スキル、葛藤解決スキル、関係構築スキルの5因子が見出された。各CS因子に対して性別(男性、女性)×学年(1

年生,2年生,3年生)の2要因分散分析を行なった。その結果,状況判断スキルは,女子生徒のほうが男子生徒よりも高く,特に中学3年において差が顕著であった。関係修復などの葛藤解決スキルは男子生徒のほうが高かった。次に,中学生の精神的健康状態について調べた。精神的健康状態に対して,性別×学年の2要因分散分析を行なった。その結果,概して女子生徒のほうが男子生徒に比べ,精神的健康状態が悪く,学年が進むにつれて状態が悪くなっていた。

第2研究では,コミュニケーション・スキル(以下,CSと表記)尺度を使用して,現代の中学生のCS,精神的健康状態を現代青年(大学生)と比較する。CSの各因子得点に対して1要因4水準(中1,中2,中3,大学生)の分散分析を行なった。その結果,自己表現,葛藤解決,関係構築のスキルは学年間でも,中学生と大学生との比較においても差がみられなかった。他方,友人の気持ちを読み取ったり,相手の立場になって考えたりなど状況を判断するスキルは,大学生のほうが中学1年生,3年生より優れていた。これは非常に高度な技術のため,成長するにつれて身につけたと考えられる。しかし,会話スキルは,中学2年生のほうが大学生よりも優れていた。また,精神的健康状態は,中学1年生,中学2年生のほうが中学3年生,大学生よりも良かった。

(2)生徒を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の実施とその効果

第3研究では,現役の中学生に対してCS訓練を実施し,その効果を検討する。訓練プログラムは1日(6時間)をかけて,1回のみ行われた。訓練参加者は,目的を理解し,参加を希望した大阪府内の公立中学校に通う中学生6名(男子生徒3名,女子生徒3名)であった。訓練の前後にCS尺度への回答を求め,その効果を検討した。まず,6名の各スキルの平均値に対して事前事後で対応のあるt検定を行った。その結果,関係構築スキルには促進効果がみられた。次に,個々人のCS尺度の各スキルに変化がみられたかを検討した。その結果,2名では5つのスキル中3スキルで向上がみられた。2名では1スキルのみ向上がみられ,他は変化がみられなかった。残りの2

名は1つのスキルで向上がみられたが他のスキルで低下がみられた。全般的に,スキル訓練による促進効果がみられた。

第4研究は,現代の中学生に対してCS訓練を実施し,その訓練が自己評価(自己効力感,自尊心)に与える影響を検討する。訓練の前後に参加者の気分,自己効力感,自尊心への回答を求め,その変化を測定した。平均値の変化を比較した結果,訓練後に参加者の否定的気分は低下していた。しかしながら,肯定的気分,自己効力感,自尊心に変

化はみられなかった。また,個々人の変化を検討した結果,半数の参加者の肯定的気分が上昇し,ほぼ全員の否定的気分が低下していた。しかしながら,自己効力感,自尊心に変化はみられなかった。コミュニケーション・スキル訓練による自己評価の変化はみられなかった。

(3)青年期のコミュニケーション・スキルと友人関係,精神的健康との関連

本研究では,第1に,同性友人,異性友人に対するコミュニケーション・スキル(以下,CSと表記)尺度を作成する。次に,その尺度を使用して青年期のCSが性別,学年により異なるかを調査する。さらに,CSにより友人関係の特徴や満足度が異なるかを検討する。調査参加者は大阪府内の私立大学(共学)に通う大学生160名(男性103名,女性57名,平均年齢19.34歳)であった。因子分析の結果,同性友人に対するCS,異性友人に対するCSともに5因子が抽出された。それらは,自己表現スキル,状況判断スキル,会話スキル,葛藤解決スキル,関係構築スキルであった。各CSの5因子に対して性別(男性,女性)×学年(1年生,2年生,3年生)の2要因分散分析を行なった。その結果,同性友人CSでは,状況判断スキルは,女性のほうが男性よりも高く,1年生よりも3年生が高かった。また,会話スキルは,1年生よりも3年生が高かった。他方,異性友人CSでは,関係構築スキルは,1年生よりも2,3年生のほうが高かった。次に,同性友人CSと友人関係との関連を検討したところ,同性友人間で状況を判断するスキルが高い人ほど,同性友人に気を使っていることが明らかとなった。また,同性友人CSと異性友人CSのすべての因子が友人関係満足度と正の相関がみられた。友人に対するCSが高い人ほど,現在の友人関係に満足していた。

続く,第2研究の目的は,青年期におけるコミュニケーション・スキルと精神的健康との関係を調べることである。第1に,同性友人,異性友人に対するコミュニケーション・スキル(以下,CSと表記)と孤独感との関連を検討する。次に,2つのCSとソーシャル・サポートとの関連を検討する。さらに,2つのCSと精神的健康との関連を検討する。相関分析の結果,同性友人,異性友人に対するCSいずれも,孤独感と負の相関がみられた。CSが高い人ほど,孤独感は低かった。次に,同性友人,異性友人に対するCSはいずれも,ソーシャル・サポートと正の相関がみられた。特に,同性友人CSにおいて,状況判断スキル,会話スキルとソーシャル・サポートに強い相関がみられた。CSが高い人ほどソーシャル・サポートを得ていた。さらに,同性友人CSの中で,会話スキルと葛藤解決スキルは精神的健康と負の相関がみられ,スキルが高いほど精神的健康状態が良好であった。異性友人CS

においても、自己表現スキル、会話スキル、葛藤解決スキルが精神的健康と負の相関がみられ、スキルが高いほど精神的健康状態が良好であった。CS が高いほど、友人関係が良好となり、ソーシャル・サポートが得られやすくなり、精神的に健康であることが示唆された。

(4)スキル訓練の応用：親密な関係の崩壊時の対処スキルとその効果

本研究の最終目的は、関係崩壊時の対処においてどのようなスキル方略が用いられ、それらが関係崩壊、関係維持、関係修復にどのような影響を与えるかを検討することである。本研究では、現代青年における別れ話の経験を調べ、その別れ話の経験率を明らかにする。その後、関係崩壊の場面において、別れたい側がどのような対処方略を用いているかを調べる。最後に、関係崩壊時の話し合い後の親密な関係の変化について調べる。調査参加者は大阪府内の私立大学(共学)に通う大学生 148 名(男性 100 名、女性 48 名、平均年齢 19.63 歳)であった。調査参加者の中で、恋愛経験のある大学生は約 70%であり、それらの中で別れ話を経験したことのある大学生は約 85 %であった。因子分析の結果、関係崩壊時に別れたい側が用いる対処方略には、7 つの因子がみられた。それらの中で、恋人非難方略は、男性よりも女性の方が使用傾向は強かった。最後に、関係崩壊時の対処方略の使用後、その話し合いにおいて、別れが成立したカップルは約 70 %であった。

続いて、第 2 研究では、関係崩壊時において、別れを切り出された側が、どのような対処方略を用いているかを調べた。また、話し合いなどの対処方略の効果、その後の関係についても検討した。恋愛経験があり、相手から別れを切り出された経験のある参加者を分析対象とした。対処方略に対する因子分析の結果、関係維持懇願、説得・話し合い、恋人非難、譲歩・受容、恋人高揚、遅延方略が抽出された。対処方略の使用は、別れを切り出された側の目的により異なっていた。関係維持、関係修復を目的とする人は、関係維持を懇願したり、話し合いを行っていた。他方、相手の考えや気持ちを尊重する目的をもつ人は譲歩・受容していた。さらに、別れに怒りを覚え攻撃を目的とした人は、恋人を非難していた。対処方略の使用に性差がみられるか検討した結果、恋人非難方略において、有意差がみられた。男性よりも女性の方が恋人非難方略を使用する傾向が高いことが示された。最後に、対処方略の中で、関係維持懇願方略が関係修復に促進的効果をもっていたが、話し合い後、関係が修復した人は 12.3%であった。その対処スキルの効果は小さかった。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- 牧野 幸志 (2014). 関係崩壊における対処方略とその効果(2) - 別れを切り出された側の対処方略は有効なのか? - 経営情報研究, 査読有, 21(2), 35-50.
- 牧野 幸志 (2013a). 関係崩壊における対処方略とその効果(1) - 親密な人間関係の崩壊時における対処方略の探索 - 経営情報研究, 査読有, 21(1), 19-33.
- 牧野 幸志 (2013b). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと精神的健康 - 同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルと精神的健康との関連 - 経営情報研究, 査読有, 20(2), 35-47.
- 牧野 幸志 (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係 - 同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討 - 経営情報研究, 査読有, 20(1), 17-32.

〔学会発表〕(計 17 件)

- Koshi Makino, Yuka Kugisaki, Sadaya Kubo Communication skills and Evaluation of Work at Workplace in Japan. SEB International Conference on Business and Economy 2016, Feb. 13th, 2016, Cebu, Philippines.
- 牧野 幸志 大学生の友人関係に関する研究 日本社会心理学会第 56 回大会 2015 年 11 月 1 日 東京女子大学(東京都)
- 牧野 幸志 現代青年の動機づけと仕事における評価 日本心理学会第 79 回大会 2015 年 9 月 22 日 名古屋国際会議場(名古屋市)
- Koshi Makino The relationships between communication skills and human relations in Japan. 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, August 19-22, 2015, Cebu City, Philippines.
- Koshi Makino Romantic relationships and their break-ups of the contemporary adolescences in Japan. The 14th European Congress of Psychology, July 9th, 2015, Milan, Italy.
- Koshi Makino COMMUNICATION SKILLS AND STRESS AT WORKPLACE. International Psychological Applications Conference and Trends 2015(InPACT 2015), May 4th, 2015, Ljubljana, Slovenia.
- 牧野 幸志 職場におけるコミュニケーション・スキルと職場ストレス 日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会 2014 年 9 月 6 日 東洋大学白山キャンパス(東京都)
- 牧野 幸志 現代青年の個人特性と仕事への動機づけ 日本社会心理学会第 55

回大会 2014年7月26日 北海道大学
札幌キャンパス(北海道)

Koshi Makino The Effects of Coping Strategies on Later Relations in the Dissolution of Romantic Relationships in Japan. : Are Coping Strategies Effective when Utilized by Individuals whom Parting was Suggested to ? 28th International Congress of Applied Psychology, July 11th, 2014, Paris, France.

Koshi Makino Human relations of the youth in Japan.- Friendship, Parent and child, and Romantic love in Japan - 1st International Symposium of Mindanao International College, Feb.2nd, 2014, Mindanao International College, Davao, Philippines.

牧野 幸志 関係崩壊時の対処方略とその効果(3) 日本社会心理学会第54回大会 2013年11月2日 沖縄国際大学(沖縄県)

牧野 幸志 恋愛関係崩壊時の話し合い 日本パーソナリティ学会第22回大会(招待講演) 2013年10月13日 江戸川大学(千葉県)

牧野 幸志 関係崩壊時の対処方略とその効果(2) 日本心理学会第77回大会 2013年9月20日 札幌コンベンションセンター(札幌市)

Koshi Makino The Coping Strategies and their Effects in the Dissolution of Romantic Relationships in Japan. 10th Asian Association of Social Psychology, August 23rd, 2013, Yogyakarta, Indonesia.

牧野 幸志 関係崩壊時の対処方略とその効果(1) 日本教育心理学会第55回総会 2013年8月17日 法政大学(東京都)

牧野 幸志 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係 日本社会心理学会第53回大会 2012年11月18日 つくば国際会議場(茨城県)

牧野 幸志 きょうだい構成と対人関係 日本教育心理学会第53回総会 2011年7月24日 北海道立道民活動センターかでの2・7(札幌市)

〔図書〕(計2件)

牧野 幸志(共著) 日本における現代青年の浮気に関する基礎研究 - 大学生の被浮気経験と浮気発覚後の行動 - 現代日本社会の心理と感情, 99-122. 中央研究院人文社会科学研究中心 2014
総ページ数 318

牧野 幸志(共著) 第12章 説得におけるユーモアの機能 深田博己(監修/編著) 心理学研究の新世紀2 社会心理学 239-251. ミネルヴァ書房 2012

総ページ数 456

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 幸志(MAKINO, Koshi)

摂南大学・経営学部・准教授

研究者番号: 00330762